

論文の内容の要旨

論文提出者氏名	園 田 光 佑
論文審査担当者	主 査 田 中 直 樹 副 査 上 原 剛 ・ 梅 村 武 司
論文題目 Relationship between Glomerular Number in Fresh Kidney Biopsy Samples and Light Microscopy Samples (新鮮腎生検検体の糸球体数と光顕標本の糸球体数の関連)	
(論文の内容の要旨) <p>【背景と目的】腎生検直後の新鮮検体に対する顕微鏡評価（現場評価）は、光顕標本での病理診断に適切な検体、つまり糸球体を含む皮質が十分に得られたかどうかを確認するために、有用であると報告されている。しかし、新鮮検体で確認された糸球体数と光顕標本内に認められる糸球体数の相関が乏しい症例も存在する。新鮮検体で糸球体数を実際より少なく判定した場合（過小評価時）には、腎生検穿刺回数の不必要な増加をもたらし、実際より多く判定した場合（過大評価時）には診断に必要な糸球体数が十分得られていない可能性があるため、どちらも臨床で大きな問題となる。これまで、新鮮検体における糸球体数の過小評価・過大評価の要因に関して、詳細な検討は行われていない。本研究は、新鮮腎生検検体で確認される糸球体数と光顕標本内の糸球体数との相関、および相関に影響を及ぼす因子を明らかにすることを目的とした。</p> <p>【対象患者及び方法】2018年11月から2020年5月の当院腎生検症例129症例を対象に、後ろ向き横断観察研究を行った。臨床的特徴、新鮮検体の現場評価所見、腎病理所見について情報を収集し、統計的に解析した。光顕標本内糸球体数 / 新鮮検体確認糸球体数 の比を計測し、その四分位に従って、全体を四分位範囲内の妥当評価群(65症例)、第三四分位数以上の過小評価群(32症例)、第一四分位数以下の過大評価群(32症例)の3群に分けた。</p> <p>【結果】新鮮検体と光顕標本の糸球体数に正の相関 ($r = 0.398, P < 0.001$) を認めた。光顕標本内糸球体数 / 新鮮検体確認糸球体数 の比の中央値は0.74であった。過小評価群は妥当評価群に比較し、IFTA(間質線維化と尿細管萎縮)および間質炎症細胞浸潤の各範囲面積が有意に大きかった。ロジスティック回帰分析でも IFTA および間質炎症細胞浸潤の範囲が有意に過小評価と関連していた。さらに新鮮検体の合計皮質長は尿細管間質障害に関わらず光顕標本の糸球体数と関連していた。過大評価群は妥当評価群に比較し光顕標本の皮質長が短い傾向があった。</p> <p>【結論】新鮮検体の糸球体数は、光顕標本の糸球体数を予測するのに有用である。尿細管間質障害は新鮮検体の糸球体数の認識を妨げるので、同障害が予測される場合には過小評価の可能性を考慮すべきである。そのような症例では、新鮮検体の皮質長が現場評価において適切な糸球体数確保の参考になる可能性がある。</p>	